

### 第3章 銀のルール

#### 1. 「感じる力」調整期 (0~2歳)

ヒトは「感じる力」最大で生まれてくる。赤ちゃんの脳は、外界のあらゆることを感知していて、忙しくて仕方がない。誕生した時の脳細胞の数が人生最多である。そして、3歳までは、「無駄に感じやすい部分」を間引いて、「感じる力」を整えていく。代わりに、細胞をつなぐネットワーク (脳神経回路) が増えていく。

感じる力が強すぎると、脳への入力が多すぎて、とっさの判断が下せない。そこで自分が生きていく環境で使う機能だけを残してスリム化し、思考のバリエーションを増やしていく。

3歳の誕生日頃までの脳は引き算。

捨てていく脳に、こざかしい英才教育は無駄というか邪魔になることさえある。早期教育なんかでいじらないほうがよい。脳は育ちたいように育つ。それは6歳までの基本姿勢。特に3歳の誕生日頃までは、子どものペースと、母親の気持ちの安定を最優先し、あせらず、いじらず、自然体に過ごすこと。

赤ちゃんが脳をフル回転させて五感で感じているものを母親もゆったり感じて生活するのが、この時期の最高の「教育」である。多忙な母親については「できるとき」だけでけっこう。

笑顔やスキンシップを交えながら、母子で、「あ〜」「ばあ」など同じ音程で声をかけあうマザリング (鳴き合い) と呼ばれる、自然なコミュニケーションが、母語獲得のスタート、ことばの始まりである。母子のこの行為による母たちの至福感が赤ちゃんの脳のコミュニケーション欲をかきたてる。こうして、ことばは溢れ出す。

このような状況から3歳神話 (3歳までは母親の手で育てよう) が生まれたが、母親の情緒が子どもの脳に大きく影響するので、真の3歳神話は「3歳までは、母親が快適 (しあわせ) に過ごすべきだ」と考える。働くのが性に合っている母は働いた方がよい。働くお母さんたちは、誇りを持って毅然と頑張る欲しい。

ことばと感性の関係として、子どもは3歳までに、その国の言語の母音を習得して固定させる。母音は気持ち (意志の方向性) を表す、コミュニケーションの基本。日本語であれば「ア」 (開放的で始まりのイメージ) 私は、主部にア段の助詞をつける。「イ」 (相手に向かってまっすぐに入り込む) 学校に、あなたにイ段の助詞。「ウ」 (受け身)。「エ」 (退く、距離を置く、後ろ向き) 学校へ。「オ」 (包み込む) あなたを愛する、お母さんなど大切なものの語頭に付加。

母語の確定前に、外国語のあやふやな母音を混在させると、母音は意識の方向性としっかり結びついているので、コミュニケーションの軸が定まらず、コミュニケーション障害を抱えることになりかねない。母音が確定する2歳までは、多言語を混ぜない方がよい。母語ミックスや帰国子女にも言及してある。

習い事も、3歳までの、子どものペースと母親の気持ちの安定を最優先し、あせらず、いじらず、自然体に過ごす銀のルールより、ゆっくりはじめよう。

男性は「近くより、遠くに興味が行く」脳の持ち主、おもちゃ同士の距離計算をして空間構成力を養っている。数学やメカに強い、男の子らしい脳に育てたいと思ったら、少なくとも3メートル以上の範囲に、おもちゃがばらばらに転がっている状態が望ましい。

抱き癖の何が悪い？抱き上げること自体はOK。赤ちゃんが泣くのは、何らかのコミュニケーション、不快を知らせる合図であり、泣けば大人が反応してくれる、この積み重ねが、親や社会への信頼の基礎になる。泣くという行為は、おむつや寒暖、空腹など生理現象だけでなく、ストレス解消の行為でもある。あやしすぎないことが肝要。あやしすぎるとストレス解消が中途半端に終わり、その後のねむりの質が悪くなりぐずる。

## 2. 「地球実験期」(2～3歳)

著者の地球実験期とは、昔は反抗期、今はイヤイヤ期と呼ばれている時期。自分のアクションが外界にどんな影響を与えるのか実験している、外界との関係性を探る子ども脳に変わる、今までのように言いなりにならなくなる時期。人生最初の臨界期(成長の階段を大きく上がる時)。いたずらですまされることは叱らず英才教育だと思って見守る。年齢が進みほとほと困った時は子どもに相談してみる。また、いっそ一緒にとんでもないことをしてみる。子どもの思いを遂げさせてあげられないときも、気持ちだけは受け止める。(親の誠意はきっと通じる。)

しかし、本当に許せないことは、叱るというよりはっきり感情を込めて怒るべき。

## 3. なぜなぜ期(4～7歳)

4歳は子どもの質問が炸裂する時期。AI時代に必須の「感性の翼」(質問力)を子どもにあげるために、子どもの質問を祝福しよう。質問に答えられないときは、「あなたは どう思う？」と聞いてみるとストレスなく片がつく。

4～7歳は小脳の発達期。小脳は空間認識と身体制御をつかさどり、直観力を作り出す器官。この時期には、ダンスもスポーツも楽器演奏も、工作も料理もお絵描きも何だって幅広く経験してほしい。「見たことも、したこともない所作」を、8歳以降に獲得しようとしてもなかなか困難である。3歳まではゆっくり遊ばせ、脳の可能性を全方位に広げておいて、特別なことは4歳以降に始めればよい。1歳で始めても4歳で始めてもそう変わらない。お稽古事の開始適齢期。

学校の勉強はやめたらダメ「投げ出さない訓練」をしているのだから。お稽古事は気楽に嫌になつたらやめればよい。真に脳に合う「夢中になれるもの」に出会えばよい。

## 4. 言語脳完成期(7～8歳)

7～8歳は空間認識と所作、言語の機能が完成する時期。言語脳完成期の大きな特徴は、長い文脈を理解するようになること。この時訪れる静かな反抗期がある。問題なのは言語脳完成期の脳が、母親の愛情を疑うような嫌疑をことばにして語ってくれず、ストレスを溜め込み、腹痛や頭痛など体の不調として表出し登校をぐずる時期。(著者は沈黙の反抗期と呼ぶ)子どもへ愛を伝える方法としてスケジュール表に○をつけさせ会社を休んでみせる。休んだその日、子どもにうるさく小言をいうことで、子どもは逃げ出しそれ以上の要求はしなかった。このように8歳は言語脳の完成に伴う、沈黙の反抗期。ここまでの育児のつけを払うときであり、態度でしっかり愛情を示す時期。沈黙の反抗期を乗り切ると、思春期の反抗期が楽。

## 5. ゴールデンエイジ(9～12歳)

9、10、11歳は子ども脳の成長の大団円。ゴールデンエイジ。

ヒトは「感じる力」満載で誕生し、3歳までに「感じる力」を間引いて調整。その後、直観力

を担当する小脳の発達期（4歳～7歳）を経て、8歳過ぎると、「考える力」を手にする。9歳から12歳の誕生日までは、「感じる力」と「考える力」と直観力を統合させる連携期にあたり、脳神経回路が大量に増産される。そして12歳、感性豊かな人間の脳の基本形が完成する。この時期は銀のルールはなしで、ひたすら金のルールを順守してほしい。

#### 5、思春期（13～15歳）

この3年間は、子ども脳から大人脳への大変換期。この時期の銀のルールの1つ目は眠らせてあげよう。銀のルール2つ目は、愛をことばで伝えよう、である。子育ての総仕上げ。

ヒトの脳は、12歳でいったん完成する。脳の感性機能は、さらに成熟し、2年後の14歳は、「その人が一生使う感性モデル」の完成期。14歳の脳が出会った「鮮烈な印象」は、一生涯、その人の琴線に触れる宝物になる。

12歳までの子ども脳は五感から入ってきた感性情報を付帯して記憶する。感性付帯記録は「とっさの判断」には使えず、大人脳への変容を遂げていく。大人脳の特徴は「差分記憶」である。素早く「類似事象との差分」を見抜き、その差分だけ記憶していく。合理的で要領はよく、「とっさの判断」には使えるが、繊細でなくなる。従って大人には見えないのものを子どもが気づき「大人はわかってない」絶望状況だが、大人になると忘れてしまう。

13～15歳は子ども脳から大人脳への移行期であり、脳が誤作動し、行動が不安定になることもあるが、あまり気にすることはない。

感性の記憶は偶発的で的確に引き出せる記憶ではなく、的確に引き出せるのはことばの情報しかない。だからことばで愛を伝えてほしい。誕生日に、生まれてきてくれたことに感謝することをお勧めする。

#### 第4章 大切なあなたに、伝えたいこと

2006年の元の本の一章をそのまま掲載。子育てのリアルを63歳の現在の著者が書けない為。

「赤ちゃん頑張ると母が言った」と胎児期の記憶を語る息子に「赤ちゃんは、どこから来るの？」と質問した。息子の「木の上に咲いていた」の答えから、著者の死生観が変わった。

母乳量や1歳児健診の「離乳しない子は犯罪者になる」のエピソードより、最後は母親の勘が最も正しいという「マニュアル神話なんか、ぶっとばせ」論を展開。

男性脳は、生活や日常言語のために使えるモデル（仕組み）ではなく、3次元の想像力を育てている。女子と比較するのではなく、男女脳の差異や男性脳の特徴を理解して子育てすることが肝要。

息子との嘘つき・ジコチュー会話からヴァレンタイン・キッスの感動話。山陰線車中の息子の朗読の感動話。息子が人生で一番気に入っている幼少期の絵本の読み聞かせについての会話の思い出より、子育て中の母親へ、絵本を読む相手がいるあなたは、「優しい夢」の真ん中にいる。どうぞ楽しんで。と結んでいる。

脳は人それぞれに、唯一の装置として生きる以上、その脳にしか残せないことを残すためにここにいるに違いない。人工知能時代は、まさに、ヒトの脳の真骨頂を体感する時代、「自分らしさ」を満喫して、その人にしか出せない素敵な答えをAIから引き出せばよい。他者の承認や賞賛を求めるあまり、自分らしさを見失うことがないように願う。「自分らしく生きる」、人生の髄も子育ての真理も、案外、そんなところにあるのではないだろうか。